

すなやま・けんいち

株式会社ゆう建築設計代表取締役。建築設計と企画を一体的に行う「建築企画」のパイオニア。関西を中心に80を超える医療・介護施設の設計を手がけ、近年では医療法人等を対象とした高齢者住宅事業のセミナーを各地で展開している。1972年、SANT-LUC DE TOURNAI 建築学校(ベルギー)留学。75年、京都大学工学部建築系学科修士課程修了。81年、ゆう建築設計設立。著書に、「医療・介護・建築関係者のための高齢者の住まい事業企画の手引き」(学芸出版社)等
http://www.eusekai.co.jp/
E-mail:sunayama@eusekai.co.jp

多様化する特養 建築から新たな可能性を探る

モノ



大きく変化する 特養の多目的スペース

砂山憲一 株式会社ゆう建築設計代表取締役



写真1



写真2



写真3

今回は、特養での多目的スペースの有効利用について検証します。ユニット型特養では入居者は各ユニットを生活拠点としますが、多くの特養は「多目的室」「多目的ホール」などと呼ばれるユニットとは独立した部屋を設けています。これは、ユニット型特養がつくられ始めた頃、多くの自治体が補助金交付の条件として、地域住民も利用できる多目的室の設置を義務づけたためです。実際に、玄関近くに会議室のような部屋をつくったケースもありますが、近隣の方にもそれほど利用されず、入居者にとっては季節ごとの行事に使用される程度で日常的に活用されていない施設も多く見受けられます。

多目的スペースを積極的に利用

弊社が設計した施設のなかで、多目的スペースを最も多様に利用しているのが、特養「グレイスヴィルまいづる」(京都府舞鶴市)です。同施設は7年前に設計しましたが、当時話題となったオーストラリアの認知症専門施設「アダーズ・ナーシングホーム」の考え方を取り入れてユニット部分を設計しまし

た。多目的スペースは会議室のように独立したのではなく、エントランスホールと一体となった広い空間で、区切りがないため、使い方には工夫が必要ですが、さまざまな目的で利用されています(図1)。

【一般の方も利用できる喫茶】
このスペースの一角にボランテニアの方によって運営されている喫茶コーナーがあり、喫茶利用の高齢者や近所の方々が立ち寄って利用されています。

【隣接する小学校児童の遊び場】
隣接する小学校との交流が活発に行われており、児童がつくったものを持って学校帰りに特養の高齢者を訪ねています。そのとき多目的スペースも利用されています。また、放課後の学童保育の場としても利用されています。

【見学者への説明、食事に利用】
見学者への説明や食事もこの広



に利用する場所としました。ユニット内で生活が完結するのではなく、動ける方はユニット外にも出会うの場を持つという発想です(図2)。

福知山学園の特養では、多目的スペースを玄関ホールとユニットの間に配置しています。ユニット訪問者が多目的室を通り、入居者もセカンドリビングとしてユニットから出てくることができます。また、同スペースを育児サークルにも利用予定です。近隣の知的障がい者施設の方々が気軽に立ち寄れるようになっていきます(写真1)。

②足湯のある多目的スペース
多目的スペースを地域住民にさらに積極的に開放したのが、特養「山田井の郷」(愛媛県四国中央市)

です。同施設は玄関奥に「足湯」を設置しました。車いすの方も利用できるように工夫しており、入居者も地域住民もともに利用可能です。4月に完成予定ですが、すでに地域の方々からは「早く使いたい」との声が届いています。

また、四国中央市は映画「書道ガールズ」で有名になった書の街です。多目的ホールや玄関ホールなどに地元書道家の書が掛けられ、書のギャラリーともなっています。(写真2、写真3)

その他、建物内にユニットを超えた交流の場として、「喫茶・カラオケ室」をつくった特養もあります。昨年完成した「第二天神の杜」(京都府長岡京市)では、同室を入居者が毎日のように利用していま

いスペースで行われます。特に区切りもなく、説明する横を入居者やご家族が通り過ぎることもあります。

【各種行事に利用】
各種行事が催され、隣接する小学校の児童が積極的に参加するため、広いスペースがいつも満員状態となります。

このように、多目的スペースがお飾りの場から、入居者や家族、来訪者によって積極的かつ日常的に利用され活気のある場所となっています。

2つの新しい多目的スペース

この「グレイスヴィルまいづる」を参考に、多目的スペースの役割を再検討し、独創的な空間を持つ施設が今年2つ完成します。

①多目的スペースをセカンドリビングに

京都府福知山市の福知山学園では、これまで知的障がい者施設を運営してきました。特養を計画するにあたり、「グレイスヴィルまいづる」での多目的室の使い方をさらに進め、同室をセカンドリビングと位置づけ、入居者がより日常的

す。また、訪問するご家族と入居者との歓談の場ともなっています。

ユニット型特養の変化

ユニット型特養では少人数での生活を重視し、ユニットの独立性がこれまで強調されてきましたが、施設側の考えに変化が感じられます。特養の要介護度はますます重度化しますが、生活がユニット内にとどまるのではなく、「より社会との接点を多く持つ」と考える施設が増えており、これが多目的スペースへのさまざまな提案へとつながっています。

以上見てきたように、ユニット型特養がスタートしたときに想定された、全国一律の特養像が現場から大きく変わり始めています。